

青森市内における暮らしの変遷 ～衣生活を中心に～

工藤 睦美¹⁾

The report of the Living life and their changes in Aomori city
focussing on Clothing Lifestyle
Mutsumi KUDO

Key words : マチ、青森市、衣生活、戦中戦後、もんぺ、めだれ、国民服、パーマ、裁縫、洗濯、出前授業

1 はじめに

郷土館では、小・中学校等への出前授業や移動博物館のテーマとして「昔の暮らし」を扱うことが多く、これらに対応した解説を行っている。子供たちには、できるだけ地域の実情を踏まえた解説が望ましいが、暮らしの内容は地域により、その様相が異なると思われる。特にマチ（都市部）とムラ（農山漁村）では同じ時代でも、生活スタイルが異なる。ムラの日常生活については今までに刊行された民俗調査報告書等が参考になるが、マチの生活について記述されたものは極めて少ない。

そこで、マチの「昔の暮らし」について聞き取り調査を行い、その状況や移り変わりについての様相を明らかにする必要があると感じている。そして、これによって得られた成果を小・中学校等に対する解説等に生かしていこうとするものである。

2 調査方法及び内容

昔の暮らしの内容を「食生活」「衣生活」「住生活」に分け、22年度は「衣生活」を中心に聞き取り調査を実施した。調査地域は青森市の旧市内及びその隣接地区に設定し、同地域で生活を営んできた方々に協力を要請した。協力いただいた話者は、以下のとおりである。

男澤絹子さん（大正13年生まれ）青森市新安方町出身

三上眞子さん（昭和3年生まれ）青森市大野出身

奥崎玲子さん（昭和3年生まれ）青森市大野出身

本稿は、以上の3名の話者から主として戦前～戦後の昭和30年代頃までの「衣生活」の様相について聞き取りした内容に基づいてまとめたものである。

また、本稿に掲載した写真はすべて、話者の方々からご提供いただいたものである。

3 衣生活の概要

(1) 服装

① 小学生の服装（戦前）

めだれ（エプロン） 青森市立古川小学校では、昭和10年頃、女の子はスカートをはき、「めだれ（エプロン）」を締めていた。写真1は入学して間もない頃の学級写真である。女の子のクラスでは、ほとんどの児童が洋服を着ており、中には着物を着た子もいるが、どちらも同じようにエプロンを締めている。「めだれ」は前垂れの方言であろう。ちょっと褻がついた、おしゃれなフリル付きのエプロンもあり、形は丸いものや四角いものがあった。色は、ほとんど白いエプロンだが、一部の裕福な子たちは「富士絹（ふじぎぬ）」（注1）でできたエプロンをしており、ベージュっぽいものもあった。話者たちは、綿のエプロンをして学校へ行ったという。普通よりかためのエプロンで、服が汚れないように、付けていたのであろう。

男の子もエプロンをすることがあり（写真2）、記念写真のとき、幼児はおしゃれなエプロンをつけてお人形を持っている。（写真3）外出の際もエプロンをつけた。（写真9）

注1）富士絹は、大正末期にできた絹織物の一種。生地（きじ）は、混紡絹紡糸を使い一般に平織に織り上げたのち柔軟仕上げを施し、羽二重（はぶたえ）のような風合いにしたものである。和服の素材になる。

1) 青森県立郷土館 研究主幹（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）



写真1 昭和10年 青森市立古川小学校1年生の学級写真（女の子は洋服を着て、エプロンをつけていた。）



写真2 昭和初期（男の子もエプロンをした。）



写真3 昭和初期(エプロンをして 2、3歳の頃)

洋服 昭和10年代、話者の方々は、洋服を着て学校に行った。母親の着物をほごして洋服に仕立てたり、セーラー服を着ている子供もいた。着物を着ていた人も中には2、3人いた。しかしズボンをはく人はいなかった。小学校6年生の頃まではスカートをはいたり、綿のワンピースのようなものを着ていた。

冬は、それに毛糸で編んだものを上に着た。セーターを着て、スカートの下にはメリヤスの股引をはいて、さらにその上に靴下をはいた。今だとタイツだが、当時は股引だった。また、スカートに毛糸のパンツをはいて、股のあたりまでの靴下留めをやる子もいた。

三上家では母親が毛糸のパンツを編んでくれて、それを綿のズロースの上にはき、さらに股引をはいてごろごろ着ぶくれていた。女の子は一年中スカートをはいた。

体操のときも、スカートのままだった。女学校になってからは、ブルマーをはくようになった。

ハレの日の服装、袴、着物 昭和10年代、小学校では、お祝いの時に袴をはいた。古川小学校では、四大節（しだいせつ）（注2）のとき、着物を着て袴をはいて行って、学校で紅白のお菓子をもらった。ハイカラな人は洋服を着ていった。私たちは、えんじ色の袴をはいた。その日は勉強はなしで、歌を歌ってお菓子をもらって帰った。

行事のために、家の人がわざわざ袴を準備していたのだろう。袴は家では作れない（縫えない）。袴には、長袖の引きずらないくらいの着物を着て、羽織を重ねて着た。履き物は、雪下駄というのがあった。下駄の裏に金（かね）の滑り止めがついているもの。四大節のうち、元旦と2月は雪下駄で、その他は普通の下駄をはいた。今思えば、親はよく長袖と袴を用意してくれたものだ。昭和16年に卒業するまで、ずっとそうしたから。

注2）四大節は、戦前は、四方拝：1月1日、紀元節：2月11日、天長節：4月29日、明治節：11月3日があった。

普段の日の服装（スカート） あの頃は、みんなスカートだった。ズボン、はかなかった。学校に行かない日も普段着はスカートで、冬は毛糸のパンツや股引をはいて、その上にスカートをはいた。小さくても女の子はスカートをはいたものだ。男でないとズボンはかないものと思った。昭和10年代に、小学校では着物を着ている人もいたが、ほとんどは洋服になっていた。女学校になって、スカートからもんぺに変わった。

② 女学生の服装（戦中）

セーラー服、もんぺ 昭和16年に女学校に入学したとき、セーラー服の制服を着た。（写真4）冬服と夏服があった。夏は白い木綿のセーラー服で、線ははいていた。冬は、長い靴下をはいて靴下どめでとめた。靴下は黒色の綿のものをはいた。

女学校に入学してから2年生まで、セーラー服の下にスカートをはいた。戦争が始まって、3年生の頃からもんぺになった。母親の着物をほごしてもんぺを作った。上がセーラー服で下が緋のもの。そのもんぺは、横があいてなくて下がつぼんだ形のものだった。

ネクタイ セーラー服は、学校によってネクタイが違っていた。青高女（県立青森高等女学校）は紺色のネクタイで、イカみたいな形のもの。（写真4、写真5）堤橋女学校が赤で、東奥女子は白、山田家政（青森山田家政女学校）は緑だったと思う。（三上）

青森市立高等女学校では、ネクタイの色は学年別だったが、後になると、全学年とも黒になった。1年のときは赤で、その後は黒だった。あの頃は、県立と市立と別々の女学校があった。（男澤）

国民服 学校ごとのセーラー服は、以前はちゃんと売っていたけど、戦時中はどの学校も同じ国民服（注3）になった。私は姉のお下がりのセーラー服があったので、それを着たけど、新しく買う人は国民服になった。へちま形の白い衿がついていた。（三上）（写真4）

昭和16年に女学校を卒業した男澤さんは、卒業するまでずっとセーラー服にスカートだったが、そのセーラー服は店に注文して作ってもらったものだという。

注3）国民服は、1940年公布の「国民服令」（昭和15年）によって定められた日本国民男子の標準服で、1942年以降は全国の生徒・学生の共通通学服としても指定された。ただし着用が強制されたわけではない。女子の場合は、戦時下ではセーラー服は贅沢であるとされ、1941（昭和16）年には文部省の学校生徒の制服統制に関する通牒により、へちま衿の全国統一型の制服となった。

履き物 靴は革靴とか、ゴムみたいなものがあり、革靴は金持ちの人がはいていた。革靴は、勤めてから自分で給料をもらって買った。

冬はゴムの長靴、藁ぐつもはいた。学校に行くとき、ゴム長もなくなったので、長靴の短いくらいの藁ぐつを履いたこともある。（奥崎）

ゴム長を修繕するとき黒いゴムがないので、タイヤのチューブを貼ったものだ。また、小さいとき、白いゴムまりがあって、そのまりを長靴に



写真4 昭和16年 女学校1年生
（セーラー服とへちま形の襟がついた国民服）



写真5 昭和18年 女学校3年生
（髪が伸びて三つ編み、セーラー服の下はもんぺ）

貼ったので、「何で、あの人が白いの！」と言われたこともある。ゴムまりが白いのでそうなったのだ。(男澤)

子供が多い人は大変だったろう。靴底が減ってしまって、つるつるしたものを履いていた。そのうちゴム靴もなくなって配給になった。

体操着 体操の時は、体操着があった。半袖のシャツみたいなものと、ブルマーがあった。黒い提灯ブルマーをはいた。(男澤)

③ 仕事着 (戦後)

三上さんは、終戦の年(昭和20年4月)に勤めたので、職場ではもんぺをはいた。もんぺは売っていないので、母親の木綿の着物をほごして作った。ほとんど、緋(かすり)や縞(しま)の着物から手縫いで作った。

写真6では、上に糸のチョッキみたいなものを着ている。髪はパーマをかけていた。戦後しばらくしてから、スカートをはくようになった。夏は、下駄をはいて通勤したこともあった。(写真7)

④ 下着

ブラジャー 昔は使わなかった。その頃は見たこともないし、女学校のときも使ったことはない。直に、肌着(シャツ)を着ていた。ブラジャーは娘になって、ある程度年をとってから使った人もいた。

肌着(シャツ) 前あきで、ゴムがついていた。寒いときは、裏があるみたいな毛羽立った厚手のメリヤス素材のシャツと股引があった。また、糸で編んだシャツや股引もあった。

夏は、キャラコみたいな生地、薄い綿のものを着た。

下穿き(ズロース) 下穿きのパンツは、縫って作った。夏用と冬用があり、冬用はネル(注4)で厚めの生地、夏は普通の薄いキャラコで作った。型紙があって、布を切って手で縫った。今で言う、だぼっとしたへそが隠れるようなパンツで、ズロースといった。

注4)ネルは、flannelの略称。羊毛のものは本ネル、木綿のものは綿ネルと区別している。キャラコは木綿。

股引 着物の中には下穿きをはかない。母親の時代は着物だったので、パンツをはかない。腰巻きをつけて、中に股引をはいていたのだろう。家の母親のパンツは見たことがない。股引は、又が割れているから下ろさなくてもトイレにいける。

生理用品 昔は脱脂綿を使った。脱脂綿がたくさん入った袋があって、自分で必要な分をちぎって使った。T字体みたいなものはあった。生理用の黒いパンツもあって、それにはゴムみたいな部分がついていた。その上にパンツをはいたと思う。

戦時中は脱脂綿もなくなって困った。ちり紙を何枚も重ねて使ったり、和紙の袋みたいなものの中に粉が入って、できあがったものも売っていた。

(2) 結髪・洗髪・風呂

① 髪型

おかっぱ 小学校の時は、髪は「おかっぱ」だった。(写真1)長さは耳の下あたりまで。髪は床屋さんで切ってもらったが、器用な人は自分で切ったようだ。男の人はほとんど丸坊主で、坊ちゃん刈りの人もいた。

三つ編み 女学校の時は「三つ編み」にした。(写真5)断髪にする人はいなかった。そうすると先生に叱られるから。1年生のときはまだ短くて、2年3年から伸ばしていった。(写真4)

パーマ

・**電気パーマ** パーマはかけたね。昭和16年に女学校を終わった人は、卒業して間もなくパーマをかけた。その時は電気パーマだった。廣澤榮著「黒髪と化粧の昭和史」によると、パーマメントウェーブ(パーマ)が日本に紹介されたのは大正10年(1921年)で、機材が日本に持ち込まれたのは大正12年、関東大震災の年である。実際にパーマネン



写真6 昭和20年春の仕事着
(勤めた頃、下駄ばき、髪はパーマ)



写真7 戦後の仕事着
(通勤はスカート、履物は下駄)

トウェーブが営業に取り入れられたのは、昭和5～6年頃で、それが昭和10年代になって急速に普及し一種の流行になった。戦前日本で行われていたパーマは、アルカリのパーマ液と電熱器を用いた電気パーマである。

昭和20年春に女学校を終わった人は、パーマ屋さんでチリチリのパーマをかけた。電気でかけるとき、熱くても動くことができず大変だった。うちわで煽いでもらって「あつー、あつー」と言いながらかけたものだ。

美容院で、パーマ液をつけてカーラーで巻き、巻いた髪を銀紙で包んで、洗濯バサミみたいなクリップをかぱっとかぶせる。そのクリップの一つ一つに線が付いていて電熱器に繋がっているのだから、逃げられない。頭に線が付いているので、火事や地震があったらどうしようと思ったと言う。あまり熱くて、あっちが熱い、こっちが熱いと言って扇いでもらったり、長くかけすぎると、「じりっじりっ」と音がして髪が焼けることがあった。

青森市が空襲を受けた昭和20年に、弘前までパーマをかけにいった人もいた。途中、川辺で列車が止まり大変だったと言うが、いろんな努力をしてパーマントウェーブをかけたのであろう。

それからコールドパーマに変わって、そんなの（電気パーマ）をやらなくてもよくなった。

・木炭パーマ 電気が不足すると、木炭を使ったときもある。戦後になって、パーマ屋さんに「木炭」を持って行ってパーマをかけてもらった。（男澤）木炭パーマは電気がないときで、自動車も木炭自動車なので、パーマもそうだったのだろう。三上さんは、姉を見てよく歌ったものだ。「パーマントに火がついて」と。熱くした木炭に火がつくので、姉がパーマかけたとき、その歌を歌ってひやかしたことがある。小さいときはパーマが珍しかったからね。

廣澤榮著「黒髪と化粧の昭和史」によると、昭和18年（1943年）の電力消費規制から、「敵性髪型」であるパーマントウェーブに電力を使うことが禁じられた。それ以来、窮余の策として、木炭を使用した代用パーマが登場する。それまで「電髪」と称されたように電熱器を用いるパーマが、電気の供給が滞ると熱源を木炭に求めた。人々は電熱のかわりに木炭を使用するという涙ぐましい努力をして、パーマントウェーブをかけたとされる。なお、木炭も統制品であるため、客が持参した。

・パーマの手入れ あの頃、ほとんどの人がパーマをかけていたような気がする。写真6の髪型は、勤めてからパーマをかけたときの写真である。チリチリのパーマをかけて、それを伸ばして前髪を高くしている。当時は、パーマをかけてから、自分でカーラーを巻いて高くするのが流行った。鏝（こて）を温めて、それで髪にくせをつけて漫画のサザエさんみたいにしたら、サザエさんのような髪型は、流行っていたよね。（男澤）

パーマをかけるのは、半年に一回かそれぐらいかな。3か月に一度のパーマなんて贅沢なので、チリチリパーマにして、（一度かけたら）半年はもたせたいと思った。



写真8 昭和7、8年頃 家族写真

大人の髪型 昔の女性（母）は、髪を長くして後ろの方に結っていた。髪には椿油をつけていた。前髪のふくらんでいるところは、何か入れている（写真8）。つけ髪やかもじ（注5）を使って「てんがら髪」、もう少し高くなれば「二百三高地」（注6）と言われるような、ふわっとした髪型にした。

日本髪るとき、黒いものを持たせて、フケをとったという。

注5)かもじは日本髪に使うつけ毛。

注6)日露戦争後に日本で流行した、前髪を張り出し、頭頂部に束ねた髪を高くまとめるような女性の髪型を「二百三高地髷（にひゃくさんこうちまげ）」という。当時普及し始めていた洋装に合う髪型として生み出された。



写真9 昭和7、8年頃 浅虫水族館へ家族旅行

② 洗髪

髪洗い粉 髪はお風呂に入るたびに洗った。うちの母親は「髪洗い粉」(注7)を使っていた。それを銭湯に持って行って髪を洗った。髪洗い粉は、あまり泡立たないが、つるつるになる。子供は石鹼で洗った。粉は使ったことがない。髪洗い粉を使うのは母親だけで、子供はおかっぱだったので、体を洗う石鹼を使って髪も洗った。(三上)

注7)「身近なモノの履歴書を知る事典」(日刊工業新聞社)によれば、1926年にシャンプーが登場する以前、わが国では「髪洗い粉」と呼ばれるものが長く利用されてきた。髪に潤いを与える火山灰や粘土などが加えられていたものだったが、これらを主成分とするため泡立たないばかりか、洗浄力もあまりないものだった。「髪洗い粉」は「白ツバキ洗粉」の商品名で販売された。

洗髪料金 小さいときは、銭湯で髪を洗っても、ただ(無料)だった。その後、風呂代のほかに洗髪料もいくらかとお金をとられるようになった。男性はとられない。

③ 風呂

内風呂 空襲で焼ける前、家には風呂があった。それは檜の風呂で、炭で焚いていた。(三上)

うちも風呂があったけど、そこに水道がついていなかった。だから水を汲みにいくわけ。なぜ水道をつけて使わなかったのか。風呂には焚き口があって、石炭を焚いていたような。それも戦争で焼けてしまった。(男澤)

銭湯 よく銭湯にいった。銭湯は混んでいて、いつもイモ洗い状態だった。銭湯の数も多かったけど、行く人も多かったから。湯壺にはいると、(使っていた)その場所をとられることがある。そして、石鹼を盗まれる。だから、みんな、石鹼を、高く持ち上げて湯壺に入った。あの頃、浅草湯(あさくさゆ)というのがあって、浅くて臭い・・・などと言ったものだ。

銭湯は戦前からあった。学校から帰れば1銭お小遣いをもらったころ、銭湯は5銭くらいだった。

垢すり 銭湯には石鹼1個と、「垢すり」をもって行った。垢すりは丸くて、ざらざらしたもの。必ず垢すりをしてから、湯壺に入った。背中を手拭いで洗った。誰かいれば、誰かにやってもらった。

今みたいに頻繁には風呂に入らない。昔は1週間に1回入れればいい方だろう。だから垢がたまっているの、ぼろぼろと垢がでてきた。今だと、垢すりは必要ないだろう。石鹼だけでいい。

(3) 服の入手・服の素材

① 入手方法

購入・注文 小学校の頃のこと、新町にロシア人がやっている店があって、そこでオーバーを買ってもらって着た。「デリコフ」という店で、日本語が上手な外国人がいた。その店も、戦争が激しくなるとなくなった。(三上)

衣料品は呉服屋、カネ長武田、夜店通りにあるマルキ飛鳥で売っていた。向かいの奈良屋などもあった。

学校のセーラー服は、前はちゃんと売っていたが、戦時中はみな同じ国民服になった。買う場合は国民服になった。私たちは、卒業するまでセーラー服だったが、売っているのではなく、注文して作ってもらった。(男澤)

配給 戦時中は、配給の衣料券で、靴下、下着、足袋などを買った。配給切符は人数に応じてもらった。何時に配給になるか、わかった時にすぐに店屋に持っていけば買えた。しかし、それは戦争が激しくない頃のことだろう。

勤労働員で藤沢の方に行っている妹から手紙が来て、「衣料品の点数あれば、こっち(藤沢)では買えるけど」と。青森では、なかなか買えない。

裁縫 下着などは、衣料券で買っても不足だったので縫ったものだ。パンツ(ズロース)なんかは、型紙があってそれを使って手で縫った。白いネルとかで縫った。

仕立て直し、軍隊の払い下げ 戦時中は、服を買ってくるのではなく着物を直して作った。売っていないもの。おしやれば、何もできなかった。

軍隊の払い下げ、海軍のズボンを婦人用に直して着たりした。戦後になって勤めてから、母親の黒い緞の着物で、ワンピースを作った。仕立て賃が高くて、給料がみないってしまった。(三上)

おばあちゃんの着物で服をつくったり、昔のマントからオーバーを作った。(男澤)

御用聞き 大野の信用町あたりでは、御用聞きがいて毎朝来ていた。今日は味噌がないといえば、味噌を持ってきて、醤油がないといえば、醤油を。砂糖とかを注文すれば、その日の午後には持ってくる。魚屋さんは、リヤカーにのせて魚を売りにきた。酒や味噌、醤油は毎日きた。「つしま屋」と「かまだ屋」といった。御用聞きがあったのは、昭和のはじめ、まだ小さい頃。このあたりは、本当に青森市のはずれっこで、昔は大野村といった。呉服屋の御用聞きも来ていた。(※昭和7年に、東津軽郡大野村の一部が青森市に編入された。)

安方の方は店があったので、御用聞きはなかった。

大野の山田町(現旭町)あたりは、出ればすぐ店はあったが、呉服屋の御用聞きは来ていた。

② 着ていたものの素材

ウール、セル 昔の人の「ウール」の着物を仕立て直してスーツにした。男の人も着物を着たので、うちには、そんなのがたくさんあった。(男澤)

セルを着ていた。セルは今でいうウールのこと。昔は、ウールのことを「セル」と言った。(三上)

緋、ニコニコ木綿 緋だけでなく、「ニコニコ」(注8)というものがあった。ニコニコは「ニコニコ緋」のことで、木綿の着物をさす。

注8)ニコニコ緋は、戦前に売り出された緋風プリントの木綿のことをいう。「ニコニコ」という名称は、「ニコニコ積み立て」という貯蓄が満期になるとこの緋をもらえたとの記述もある。また、緋は、模様がところどころにおいて「かすった」ように織られた染め文様、もしくはそのような文様を持つ織物のことである。織りによってそれを表現したのを「織緋」、染めることによって表現したものを「染緋」という。緋は、綿織物が多いが、絹や麻等でも織られる。

人絹(じんけん)、スフ 昔、着ていたシャツは、ほとんど綿のシャツだったが、その頃、「スフ」と呼ばれる「人絹(じんけん)」(注9)の素材があった。つるつるしているので化学繊維だろう。下着の上に、仕立て直した「スフ(人絹)」の服を着た。

注9)人絹(じんけん)は、人造絹糸とも。絹のような外観をもった人造繊維。レーヨン、アセテートなどがあり、繊維の短いものはステープル・ファイバー「スフ」と呼ぶ。人造絹糸は、大正4年(1915)米沢高等工業学校(現・山形大学工学部)教授秦逸三の研究により発明され、製造が始まった。

毛糸 毛糸はあった。純毛でないような毛糸もあった。スキー毛糸は良かった。毛糸の服は、家でお母さんが編む人もいるけど、毛糸屋に頼んで編んでもらうこともある。多分、編み針を使った手編み(機械編みではなく)だった。古川小学校の近くに、三上という店があってそこで編んでもらった。あと、夜店通りに「乙女屋」がある。洋品店みたいな店で、毛糸や生地などを売っていた。女学校の向かいには「おたふく屋」があった。

・**毛糸の色落ち** 昔の毛糸は、よく色が落ちた。スカートの下に赤い毛糸のパンツをはいて、坂をすーと滑れば、坂にパンツの色がついてしまったものだ。お尻で滑るから。よく毛糸から色が落ちて、あたりが汚れた。そのまま家に帰ってコタツに入ったこともある。

・**毛糸物の編み直し** セーターは、ほごして糸にしてから編み直した。ほごして洗った糸を飯台の足にかけて、やかんの口からでる蒸気で伸ばした。洗った毛糸を輪にして、ちりちりを伸ばした。編み直しは、店に頼んだり、家で編んだりした。

奥崎家では、母親が働いていたので、おばあちゃんのご飯を作っていた。親はもっぱら働くだけで、近所のやつえさんのお母さんに編んでもらった。その頃、スキー毛糸というものがある、乙女屋でも売っている良いものだった。やつえさんは、母親が服を編んでいるから、自分のために編んでいるのかなと思って聞いたところ、向かいの玲子ちゃんのだと言われて、それを家の母親に話したという。それでわかった。その後、何年もそのセーターはあった。自分も年ごろになって、物がなくなったとき、そのセーターをほごして手袋を編んだりした。そのときに、この毛糸が小学校のときにあったスキー毛糸だと思った。いいものであれば、長く使うことができた。

戦争になってから、本当の純毛でない、何か混ざったような毛糸があった。それで編んだものは、袖口が伸びてしまったものだ。比べてみれば、後からでた毛糸はあまり良くなかった。暖かみも違うしね。小さいときは純毛のスキー毛糸とかだった。その後、虫が食べないような毛糸が出てきた。今だとアクリル、毛玉ができるのは好きでなかった。洗濯は楽だけだね。

(4) 裁縫

女学校 私たちは学校で裁縫を習った。女学校は裁縫の時間が多くて、和裁も、洋裁もやった。男澤さんときは、1週間に6時間、三上さんのときは(戦争が激しくなり)4時間だった。何曜日の何時間目は裁縫の時間とか言ったものだ。

早縫い競争もあった。浴衣を何時間で縫うかの競争で、一等をとったことある。(三上)

運針練習もあった。体操の時着るものを縫った。洋裁のときはミシンを使って練習した。(男澤)

洋裁は、習いに行った人もある。(奥崎)

ミシンかけ 青森高女3年、4年のとき、学校にミシンがいっぱいあって軍隊の服を縫った。それは軍服の下に着るもので、袖を付ける人は袖付けを、襟を付ける人は襟付けを専門にやった。だからミシンはとても上手になった。縫い方はわからないけど、ミシンかけだけは上手。足踏みミシンだが、特別に学校へミシンをよこしたのだろう。

自分は、はじめから裁断されたものをミシンで縫った。脇を縫う人や襟をつける人、他に検査する人がいて、だめだとやり直しになった。

今考えると、何も勉強しないで畑とそれだけだった。ちょうど終戦の年に女学校を終わっているのだから、戦争たけなわのときだったから。

青森空襲を記録する会「青森県学徒勤労動員抄史」によると、昭和19年「青森県工場事業場等学徒勤労動員実施二関スル件」が通達されると、県内では第一次の指定工場として、県立青森高女と弘前高女の2校が指定され（後に市立青森高女も指定）、青高女では7月22日、9教室にミシン百数十台を準備して青高女学校工場を開場した。

専門の学校 奥崎さんは、小学校卒業後に浦町の高等科（2年）に進み、高等科を終わってもなにもならないので、そのあと青森技芸学院に行った。そこには、以前は外人の先生がいたというが、昭和18年頃は外人の先生は誰もいなかった。みな日本人の先生だった。青森技芸学院に2年間行ったが、教練だとか、そんなものばかりだった。畑に行ったり山に行ったりで、裁縫はあまりやらなかった。

（5）洗濯

① 洗濯のしかた

洗濯の頻度 洗濯はあまりやらない。下着は洗ったけど、よけい洗濯はしなかった。毎日着て、垢でテカテカしていた。夏服は洗濯した。夏は白い木綿のセーラー服だった。

洗濯屋 洗濯屋は何件かあった。しかし、そう洗濯屋には出さないで、手洗いでやった。オーバーなんかも、春にお日様に干して、ブラシをかけておいて、次の年もまたそれを着た。

手洗い お湯を沸かして洗い、すすぎは水だった。揉んで洗ったから、手の甲のあたりがとても痛くて大変だった。手袋はないし、手の皮が剥げることもあった。

洗濯機があるのは一番助かる気がする。最初洗濯機を買ったときは嬉しかった。結婚してからだから、昭和30年代の頃だろう。昔のお母さんはよくやった。明治の女はえらいと思う。

※国内初の噴流式洗濯機であるサンヨー洗濯機の発売は昭和28(1953)年。

② 洗濯の場所

流し 洗濯は、流しでやった。表に盥を出して洗ったこともあった。

流しが大きくて、そこに、まな板を置いて野菜や魚を切ったり、顔を洗うときは洗面器をそこに置いて洗った。洗濯もそこでした。洗面所と流しが一緒だったので、流しで顔を洗って、洗濯もそこでした。

流しはセメントできていて大きいもので、6尺ぐらいあった。そこに木のスノコを敷いて、料理をするのでまな板も置いて、みな一緒。まな板はもちろん洗ってから使った。

流しは、今みたいに水をジャージャー出してやったわけではない。柄杓で何度も汲んでやった。水道はあったけれども、真ん中に蛇口がなくて横にあるので、横の方に一旦水を溜めておいて、そこから柄杓（ひしゃく）で汲んで使った。それは、終戦後もずっとそうだった。

水道 それでも、水道が中に入ったのはよかったね。なければ、外に汲みに行かねばならない。

戦争の前は、共同の水道を使っているところもあった。何軒かで共同の水道だったが、井戸ではなかった。毎日そこに汲みに行く人は大変だなーと思った。

井戸 大野の方では井戸の人もあった。町内に井戸が一つあって、そこにみんな汲みに行っていた。水道がない家もあったようだ。冬は井戸が凍ってしまっている。ちょっとした屋根はかかっているが。学校に行く途中、その近くを通っていくので、水汲みは大変だなーと思った。今みに手袋はなく、しもやけや皸（ひび）が切れていた。冬は、家の水道を少しだけ流しっぱなしにして、凍らないようにした。

青森市史によれば、青森市の水道は、明治42年横内浄水場から通水を開始したのが始まりで、全国で13番目に創設された。

③ 洗剤

石けん 洗濯には、固形の石けんを使った。当時の石けんは、洗濯石けんと顔を洗う石けんの2種類があった。

セーターは、洗うと縮んでしまう。熱いお湯だと特に縮むが、今のような中性洗剤はなかった。洗濯石けんがあればいいほうで、戦争中には灰も使った。魚の脂で作った石けんもあった。臭い石けんだった。

洗濯するときは、いつも石けんを使い、何も使わないで洗ったことはない。だって、洗濯はそんなにしないから。それに親が洗っていたから。

磨き砂 皿の油は、磨き砂をつけてタワシで洗った。磨き砂は、缶に入れて売りに来た。それを量り売りで買った。あれは何で作ったのか。火山灰みたいで、色はちょっと灰色のような色がついていた。鍋も磨き砂で洗い、柄杓で水をかけてすすいだ。縄文時代みたいだね。

④ 炭火アイロン、鋺（こて）

戦前からアイロンは使った。炭を入れて使った。（三上）

うちはなくて、一足とびに電気になった。しかし、鋺（こて）はあったので、裁縫するとき熱くして使った。（奥崎）

4 その他

出前授業の際、子供たちに語り伝えるエピソードとして、話者の子供の頃の遊びや学校の思い出について聞いた。

（1）学校での様子、思い出

遠足、修学旅行

昭和10年代、青森市立古川小学校では遠足や修学旅行があった。

3年生の時は浅虫、4年生は弘前、5年生は八戸、6年生は函館と、学年ごとに色々な所へ行った。5年生までは日帰りだったが、函館のときは泊まった。3年生の浅虫は車でいった。4年生の弘前は、弘前公園に為信の銅像があった頃で、その後に供出したのだろう。その時はまだ銅像があった。八戸までも行った。八戸も日帰り、蕪島とかにいった。吊り橋が怖かったのを覚えている。

昭和15年、6年生のときの修学旅行で、初めて連絡船に乗って函館へいった。函館では一泊した。行事のときは、できるだけいいものを着ていった。

行事のお弁当

遠足には、ゆで卵とキャラメルを持っていった。チョコレートなども持っていった。当時、板チョコのチョコレートがあった。そしておにぎりに、必ずゆで卵を添えて持っていく。

運動会は合浦公園で行い、お重を持っていった。校庭が狭いからだろう、合浦公園まで歩いていった。お祭りみたいに、親が重箱にごちそうを入れて持ってきた。運動会はスカートで走ったと思う。他に何もはくものはない。ズボンはなかったし、男でないとはくものではなかった。家のお母さんは着物を着ていた。大人の女性はズボンをはかない。戦争になって、着物からもんぺになった。

小学校のとき

小学校から、男と女のクラスが別れていた。古川小学校は5学級あって、1と2が男子で4と5が女子、3は混ざりのクラスだった。話者の三上さん、奥崎さんは、古川小学校の同級生で、同じクラス（女のクラス）だった。小学校のときは、組替えはしないので、6年間一緒のクラスである。男澤さんは、長島小学校で混ざりのクラスだった。

当時から小学校は6年生まであり、中学校になれば男女は別々になった。男子は中学校、女子は女学校などである。女学校は4年生までで、その上に高等科が2年あった。

小学校では、1クラスの人数が60人くらい。（写真1のクラス写真では59人写っている）先生の目も届かないから、勉強がわからなくてもそのままだったね。それでもいじめ等なかったから良かった。わからない人もそのままに進んでいくから、ただ座っているような人もいたし、悪いことをすると叩かれたりもしたね。

先生の服装、育児

古川小学校では、女の先生は着物を着て袴をはいていた。5、6年になったら、服を着ている先生もいた。体操の先生は服を着ていた。先生はみな女性だったが、女学校では男の先生もいた。

長島小学校の男澤さんは、1年生から3年生のときまで男の先生だった。担任の女の先生がときどきお産をして、代わりの先生がくるが、それが男の先生だった。女の先生はお産が終わるとすぐ戻ってきた。誰か面倒みるおばあさんがいたかも。今みたいに長い産休はなかったような気がする。その頃、昔で言う小遣い室があって、休み時間になると、そこに先生がおっぱいを飲ませに行っていた。珍しくて皆それを見に行っていたものだ。

女学校の思い出

女学校で10里行軍というのがあった。後藤伍長の銅像まで片道5里、往復10里を歩くものである。浅虫まで走らせられたこともあった。そんなに食べられない時代だったのに、よく歩いたね。若いからね。おっかない先生がいて、最後まで歩いた。

(2) 戦争のこと

青森大空襲のとき

昭和20年7月28日、空襲は夜だった。夜の10時頃かな。

男澤さんは、その頃女学校を卒業して会社に勤めていた。会社の事務所が沖館の営林局のあたりにあって、空襲警報が鳴ったら当番の人が出るようになっていた。男澤さんは、その時ちょうど会社に出ていた。「何時ごろだったか、会社の防空壕に入っていたら、事務所に落ちたのよ。燃えたので、防空壕の水あるでしょう、ボーフラがわいているような。誰こんなのかぶられると思ってね、それでも、その水かぶって出て行ったの。」

事務所に焼夷弾が落ちたが、隣近所には落ちなかった。しかも、どっと落ちたのではなく、中二階の「まげ」といった所に紙が置いてあって、そこに落ちた。すぐに下まで火がこないで、(燃えているのが)わからなかった。みんな焼けてしまったら朝になっていた。火を消していたので、朝にずぶ濡れになって家に帰った。

三上さんの家では、床の間に焼夷弾が落ちた。寝ている所には落ちなかったが、両隣に落ちた。「うちの母親は病気で寝たきりで、そこで(母親を)おぶって田んぼの方へ逃げた。畦道で二人足をとられて、どーんと転んで、家が焼けるのを見ていたの。うちの隣も、まげに藁が置いてあって、そこに落ちたの。それで隣のまげから燃えてきて、後から消しに行ったって間に合わない。父親が一生懸命に水かけたって、間に合わないのさ。」

5 まとめにかえて

話者の方々は、青森市内(マチ)で商売をされたりまたはサラリーマンのご家族である。太平洋戦争末期、青森空襲に遭い、あらゆるものが焼けてしまった体験を持つ。その当時からうじて焼け残った写真があった。今回はそれを持ってきていただき、「昔の暮らし」について話を聞くことができた。

話者の皆さんの写真には、共通して、子供がつける「めだれ(前垂れ)」がでてきたのに驚かされた。偶然であろうが、当時は生活上の習慣だったのか、それとも流行だったのか。その後、最近刊行された書籍の中で、佐藤きむさんのエッセイに似たような写真が出ていた。少なくとも津軽地域ではそのような事例があったのであろう。

また、服装にはつきものの髪型、とくに電気パーマをかける苦労話に興味をそそられた。戦争中であつたため、木炭を使ってパーマをかけるなど、オシャレをするのは大変な時代だったのであろう。これらはかなり様相が異なるが、どんな時代にも、人々には様々な暮らしぶりがあることを確認できたように思う。これらのエピソードを含めて、学校の出前授業等に活かしていきたい。

6 謝辞

本稿を作成するにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた土曜セミナー参加者の男澤絹子氏、三上眞子氏、奥崎玲子氏及び、本テーマを与えていただき、調査全般に渡りご指導くださった県立郷土館学芸員の成田敏氏より、特段のご協力とご教示を賜りました。記して深く感謝いたします。

主要参考文献

廣澤 榮 1993「黒髪と化粧の昭和史」岩波書店

青森市史編纂委員会 2008 新青森市史 別編3 民俗

青森空襲を記録する会 「青森県学徒勤労動員抄史」

「身近なモノの履歴書を知る事典」2002 日刊工業新聞社